

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370858

研究課題名(和文)自由フランスと主権回復の闘いに関する総合的研究

研究課題名(英文) A Study on Free France in the Second World War from a viewpoint of restoring Sovereignty

研究代表者

渡辺 和行 (WATANABE, Kazuyuki)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：10167108

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：ドゴールが率いた自由フランスの闘いを、主権回復の闘いという点から解明を試みた。主権の三要素は、領域・国民・中央政府である。そこで、自由フランスが領土をいかにして獲得したのかについて、太平洋から赤道アフリカ・北アフリカ・本土フランスという時系列で明らかにした。第二に、自由フランスが国民の支持をいかに調達したのかについて、国内レジスタンスの統一組織、全国抵抗評議会(CNR)の設立に至る過程をフォローし、CNRがドゴールを支持する声明を発した点に国民の支持を見出した。第三に、自由フランスが中央政府をいかにして樹立し、外交上の承認を得たのかについて、国民委員会から共和国臨時政府に至る歩みを押さえた。

研究成果の概要(英文)：I have studied a history of Free France in the Second World War. There were no books on that theme in Japan except for one translation of the French pocket book written by Henri Michel fifty years ago. Charles de Gaulle, a chief of Free France, battled against the enemy in order to restore Sovereignty and Republic in France. Sovereignty consists of three elements, that is to say, Territory, Nation and Central Government. Therefore the purpose of my research is to explain how Free France could obtain three elements of Sovereignty. In the first place, how Free France could gain the territories governed by Vichy Government in the French colonies and French overseas lands? Secondly how Free France could be supported by the majority of French people? Thirdly how Free France could establish a provisional government and obtain the diplomatic recognition of a provisional government by the Allies. I would prove three aspects of Sovereignty for which de Gaulle had fought.

研究分野：フランス現代史

キーワード：自由フランス ドゴール レジスタンス 主権回復

1. 研究開始当初の背景

わが国では主題に「自由フランス」と銘打つ書物は現在までのところ、新書版の翻訳1点(アンリ・ミシェル『自由フランスの歴史』クセジュ文庫、1974年)しか刊行されておらず、日本人の手になる研究書はゼロである。なぜ、わが国では自由フランスの研究が、これほどまでに不人気で低調なのだろうか。研究史にその理由が示されている。1960年代まではレジスタンスの研究が圧倒的に多かったが、日本からの関心は共産党を中心とした国内レジスタンスに注がれた。しかし、ドゴールの権力掌握によってフランス解放が「裏切られた解放」となり、フランス左翼の間に反ドゴール感情が高じた。さらに、レジスタンス研究は、国民総抵抗神話としてのレジスタンスを顕彰することで、引き裂かれていた国民の記憶ないし亀裂を覆い隠す国民統合の道具となり、栄光のレジスタンス神話の形成に寄与した。しかも、レジスタンスを顕彰することは、結果的に自由フランスの首長ドゴールを称えることになり、それは、第五共和政の初代大統領ドゴールとドゴール派政党の正統性にも繋がった。こうした状況が、研究者の自由フランスに対する関心を削ぐことになった。

さらに、1970-90年代にはヴィシー政権の対独協力に光があてられ、次いで1980年代から始まった「ユダヤ人狩り」に関与した3つの戦犯裁判によってユダヤ人迫害の問題に関心が移り、レジスタンス研究は下火になった。それでも、フランス本国では1970年のドゴール死去後に本格的な自由フランス研究が始まり、とりわけ1990年代からシンポジウムや研究書・事典の編纂などが相継いだ。わが国の自由フランス研究は低調のままであり、フランス本国の研究に50年の遅れをとった。レジスタンスの脱神話化が進んだ今こそ、自由フ

ランスの歴史を再構築する良い機会である。

以上のように本研究課題は、対独協力やユダヤ人迫害の研究と比べて、出遅れ感のある国外レジスタンスの代表、自由フランスの歴史を解明することを目的としている。それは、対独抵抗と対独協力をバランスよく組み込んだ第二次世界大戦期フランスのトータルな歴史像の構築にとって必要不可欠な作業である。

2. 研究の目的

ドゴールの自由フランスが目指したものは、ドイツ占領軍を駆逐して共和国を再建すること、つまり主権の回復であった。そこで本研究は、主権の三要素がいかんにして満たされたのかという視点で自由フランスの歴史を再構築し、わが国の研究水準を国際水準まで引き上げることを目指した。

3. 研究の方法

自由フランスの歴史に迫る方法として、主権回復の戦いに焦点を当てた。主権の三要素が領域・国民・中央政府であることから、本研究課題においてもテーマを3つに細分した。領土をどのようにして獲得し支配していったのかという政治的・軍事的側面。国民の支持をどのようにして獲得していったのかという政治的・社会的・心理的側面。中央政府をいかんにして組織し政府の承認を得たのかという行政的・法律的・外交的側面。以上の3つに分けて研究を進めた。これら三要素は、実際には分かちがたく結びついているので、現実には同時並行的に研究を進めざるをえなかった。連合国首脳間の駆け引きや国内レジスタンス(共産党)との覇権争いなども、以上の分析枠組みで論じることが可能であった。

そこで本研究課題は、主権の三要素を1つずつ解明することで自由フランスを通したフランス共和国再建史を描くことを目的

とした。

まず、の領域支配についてであるが、フランスの海外植民地がいつ自由フランスの陣営に属したのかについてわが国では案外と知られていないこともあり、ヴィシー政府と自由フランスとの間で展開された植民地の帰属をめぐる重要な戦闘にも触れつつ、領土獲得のクロノロジーを明らかにした。したがって、軍事史や戦闘史中心のアプローチを取るのではなくて、海外植民地の総督や司令官がいつ自由フランスの支配に服したのかを地域ごとに解明していくことにした。西アフリカ、赤道アフリカ、インドシナ、南太平洋、カリブ海、そして北アフリカについて、それぞれ検討した。この点は先行研究でも不十分な点が多いので重要であり、ドゴールが権力基盤を打ち固めていく過程を解明するためにも意味があった。併せて、植民地兵や外国人部隊の実態についても触れることで、レジスタンス神話の脱構築や帝国意識の一端に迫ることも目指した。

の国民の支持獲得過程とは、具体的には国内のレジスタンス諸勢力を統合していく過程である。国内レジスタンスと国外レジスタンスの自由フランスとの連携に至るプロセスや、諜報組織による働きかけ、ドゴールの腹心ジャン・ムーランによる全国抵抗評議会の結成と全国抵抗評議会によるドゴール支持声明に至る過程を明らかにした。さらに、国内レジスタンスの一大勢力となった共産党とのヘゲモニー争いについても論及する必要がある。共産党関係者の回想録を用いてアプローチした。また、エリオ（急進党）、ブルム（社会党）、エマニュエル・ダスティエ、ピエール・ムニエ、アルベール・シャンボン、レミ、パッシーなどの政治家やレジスタンス活動家の回想録などを交えながら、自由フランスへの支持の高まりを解明した。

の中央政府の組織化と政府承認の問題については、1940年9月の植民地防衛評議会の設立から1943年6月のフランス国民解放委員会の結成、そして1944年6月の共和国臨時政府の成立、および同年10月の英米政府による臨時政府の承認に至るプロセスを、行政組織の再編過程として政府組織の整備や各委員（＝各大臣）の職務内容と省庁の再編、外交交渉による外国政府からの承認などについて解明した。その過程でドゴールとジロー將軍との争い、ドゴールと英米首脳との罅迫り合いなども交えて分析することができた。

4．研究成果

研究成果の一端は、「3．研究の方法」でも触れているので繰り返しは避けるが、本研究課題の成果は、主権の三要素に注目して自由フランスによる共和国の再建過程を跡づけたことにある。しかも、研究期間の3年間で1冊の研究書として上梓可能な段階まで研究を進捗させたことも成果と云う。本研究課題の研究成果は、2017年秋に『ドゴールと自由フランス 主権回復のレジスタンス』（昭和堂）として出版予定である。

本書によって、日本人が初めて書いた自由フランス研究が日の目を見ることになり、フランスの研究水準との「時差50年」を取り戻すことができ、併せて、後進のための基本文献としての役割も果たすことが期待され、自由フランスに関する国際的な研究交流も深めることができるだろう。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

渡辺和行「移民先進国フランスからの問い」「世界史のしおり」2015年度3学期号、2016年1月、10-11頁、査読なし。

渡辺和行「ナチ占領下フランスのグレ

ーゾーン ムーニエとミッテラン」『史潮』新78号、2015年12月、4-24頁、査読なし。

渡辺和行「フランス人民戦線と余暇の組織化」『日仏歴史学会報』第29号、2014年6月、43-45頁、査読なし。

渡辺和行「レジスタンスの再神話化と脱神話化」映画『シャトーブリアンからの手紙』パンフレット所収、2014年6月、11-12頁、査読なし。

〔学会発表〕(計 3 件)

渡辺和行「両世界大戦期フランスにおける適性外国人と強制収容 国民国家と戦争」第3回埼玉大学人文社会科学研究所連続シンポジウム「混成する文化：歴史と物語の交点」2016年2月27日、埼玉大学東京ステーションカレッジにて。

渡辺和行「ナチ占領下フランスにおける<グレーゾーン> フランソワ・ミッテラン」国際シンポジウム「抵抗と協力の狭間で 占領地・植民地における<グレーゾーン> 国際比較の視点から」2015年12月5日、明治大学駿河台キャンパスにて

渡辺和行「ナチ占領下フランスにおける<グレーゾーン> ムーニエとミッテラン」ワークショップ「占領地・植民地における<グレーゾーン>を考える 国際比較の視点から」

2014年8月9日、大妻女子大学にて。

〔図書〕(計 3 件)

渡辺和行「アナール派の変遷」鹿島徹・越門勝彦・川口茂雄編『リクール読本』法政大学出版局、2016年7月、181-190頁、査読有。

渡辺和行「大戦前フランスの政争」および渡辺和行「反ファシズム人民戦線の興亡」南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵編『新しく学ぶ西洋の歴史』ミネルヴァ書房、2016年2月、205-206頁、256-257頁、査読有。

渡辺和行「ドゴールの時代」杉本淑彦・竹中幸史編『教養のフランス近現代史』ミネルヴァ書房、2015年6月、291-305頁、査読なし。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 和行 (Watanabe, Kazuyuki)
奈良女子大学・人文科学系・教授
研究者番号：10167108

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：

(4) 研究協力者

なし ()